

クロード・モネの白内障

日野病院名誉病院長 井上幸次



昨年5月に新型コロナも5類になって、自由に東京などへ行くことができるようになり、秋には学会や会議などで出かける機会が、コロナ前に戻った感じでした。コロナ前は東京に行ったついでによく美術館によったものでしたが、ようやくそれができるようになり、先日も東京に行ったついでに「上野の森美術館」で開催されていたクロード・モネの展覧会に行ってきました。モネ展は過去に何度も行っていますが、何度行っても飽きるということはなく、いつも心が癒されます。

モネはいわずと知れた印象派の画家で、それまでの写真のようなリアルな描き方と違って、描かれた物よりも色と光を伝える描き方をしたことが革新的だったのですが、それでもずっと自分の見たものを描き続けていました。ただ、長生きをしたために、20世紀に入ってから、抽象画が多く描かれるようになってくると、時代遅れのように思われることもあったようです。ところが、1920年頃になると、だんだん何が描いてあるのかわかりにくくなり、見たままではなくて抽象画の流行に合わせてきたのではないかとも思われます。ところが実は、モネは白内障になり、それがだんだんと進んできて、視力がかなり悪くなっていったようなのです。つまりモネは流行に合わせてのではなく、あくまで自分の見たままを描いていたのです。この時期のモネの絵は形がわからないだけでなく、色も暗くなっているのは白内障進行の現れだと（眼科医の私には）思われます。画家にとって、見えなくなっていくのがどんなに恐ろしいことだったかと思うのですが、最終的にいよいよ描けなくなって、記録によると1923年に右眼の白内障の手術を受けたとのこと。そう、ちょうど今から百年前のことです。その頃の白内障の手術は大変で、術後数日間両眼に眼帯をして、寝たままで動けなかったようで、しかも1回ですむことはなく、うまくいかないことも多かったようです。モネも結局右眼だけで3回の手術が必要で、そのたびに体調をくずし、（何しろ繊細な人ですから）精神的にもまいってしまったようなのです。そのため、右眼の手術だけで、もうこりごりということになって、左眼は手術しませんでした。しかもこの時代には眼内レンズなどはもちろんないので、ひじょうに分厚い眼鏡をかけなければならず、それになじむのにも苦労したとのこと。ただ、その手術のおかげで、最晩年に睡蓮の連作を描くことができ、しかも明るい色に戻って、青みはむしろ強くなり、何が描いてあるのかもよくわかるようになったので、やっぱりモネはずっと自分の見たものだけを描き続けていたのだとわかります。白内障手術のおかげで、モネの芸術は蘇り、それを今の我々が見て、楽しむことができるわけですから、この白内障の手術を執刀したCoutelaというドクターには我々も感謝した方がよさそうです。

その後の百年で、白内障手術は長足の進歩を遂げて、眼内レンズも導入され、今や日本で年間150万眼の手術が行われ、高齢者の生活を豊かにすることに役立っています。モネも含めて、昔の患者さんがいかに病気で苦労してきたかを知ると、そのおかげで、それを何とかよくしようと多くの人がさまざまな工夫をしたことで、今の医療技術があるわけですから、昔わずらっていた人達のおかげで今の私たちが助かっているのだということを強く感じます。病気はどれもそうでしょうが、たとえば結核でたくさんの方が若くして亡くなったからこそ、いろいろな治療法や薬が開発されて、今のわたしたちは結核で昔ほどには苦しまなくてよくなっているのですから、患者側も医療者側も含めて昔の人達への感謝を忘れてはいけないなと感じます。